真っ赤なお鼻の末摘花 ―笑われたのは誰だったのか―

布川　由紀
（山本　淳子ゼミ）

目　次

はじめに
第一章　「末摘花」巻における「笑い」
　1　末摘花について ―まだ見ぬ姿―
　2　「末摘花」巻の「笑い」―理想と現実―
第二章　「蓬生」巻における「笑い」
　1　「蓬生」巻での末摘花
　2　「蓬生」巻に「笑い」は存在するか
第三章　「笑い」の対象
　1　「玉鬘」「初音」「行幸」「若菜上」巻での末摘花
　2　「笑い」
おわりに

はじめに

「源氏物語」には多くの女が登場している。美しく、儚く、かわいらしい魅力ある女がたくさん登場する。しかし全ての女がこのように書かれてはいない。私はその中でも醜女のように書かれ、末摘花と呼ばれた常陸の姫君である女性に興味を持った。

容姿について細かく書かれ、服装や性格についても古風であるとされ、多くの女と比較されている。光源氏を困らせ、苦笑いさせる末摘花は笑いの話と捉えられていることが多い。果たしてこの「笑い」とは誰に対するどんな笑いを指しているのだろうか、私は疑問を感じた。

よって本稿では、笑いの話とされるなかで笑いの対象は誰なのかについて考察していきたい。第一章では、末摘花が初めて登場する「末摘花」巻においての笑いについて考察する。第二章では、末摘花が報われ始める「蓬生」巻では笑いはどのように変化しているのかを考察し、第三章では、それ以降に登場する巻においてはどうかを読み解いていきたい。なお、本稿を書くにあたって、『源氏物語』の先の展開を知らずに読んでいた当時の人の立場として順を追って考えていくこととする。

第一章　「末摘花」巻における「笑い」

1　末摘花について ―まだ見ぬ姿―

末摘花は、「末摘花」巻に初めて登場し、「蓬生」「玉鬘」「初音」「行幸」「若菜上」と後の巻でも別の女との比較対象として書かれている。まずは初めて登場する「末摘花」巻での末摘花について見ていきたい。引用する本文と巻名、ページは中野幸一『正訳源氏物語本文対照』第二冊（勉誠出版、二〇一六年）による。

思へどもなほあかざりし夕顔の露に後れし心地を、年月経れど思し忘れず、ここもかしこもうちとけぬかぎりの、気色ばみ心深き方の御いどましさに、け近くうちとけたりし、あはれに、似るものなう恋しく思ほえたまふ。

（「末摘花」四ページ）

光源氏が亡き夕顔を忘れられず面影を追い求めていることが分かるこの文が、「末摘花」巻の始まりである。この時点で、次に登場する女は夕顔と比較されることが読み手側も想像できるのではないだろうか。

源氏は、大輔の命婦から故常陸の宮の姫君の噂を聞き、頭の中将(1)もライバル意識をもち、この姫君と関わっていく。その後、姫君である末摘花の全貌が明らかになっていく。まずは、後に末摘花と呼ばれるこの姫君についてみていく。

末摘花・常陸の姫君は父親である常陸の宮を亡くし、母親についても「末摘花」巻では書かれていない。源氏が故常陸の宮の姫君の噂を聞き、姫君がひとり残されていることを知ると、「あはれのことや」(「末摘花」六ページ)と同情しているものだ。琴を相手に、没落したといえる荒れ果てた邸で生活する姫君。いままでと同じように興味をもった源氏が十六夜の月が美しい頃に訪れる。

「なほあなたに渡りて、ただ一声ももよほしきこえよ。空しくて帰らむが、ねたかるべきを」　(「末摘花」八ページ)

源氏は命婦へ、姫に琴を弾いてもらうようにお願いしてくれ、と頼むのである。優れたお手並みでもなかった姫君の演奏だが、源氏にはかすかに掻き鳴らされる琴の音が趣深く聞こえるのであった。この時点で読み手は源氏よりも先に、この姫君は琴が優れていないことなどの情報を得ることができる。しかし源氏はそんなことを知らずに、姫君を想う。この差が、後の笑いの要素に繋がっていくのだと考えられる。

「透垣のただすこし折れ残りたる隠れの方に、立ち寄りたまふに、もとより立てる男ありけり。誰ならむ、心かけたるすき者ありけりと思して、蔭につきてたち隠れたまへば、頭中将なりけり。」　(「末摘花」一二ページ)

姫君の気配が聞けるかと、部屋を出る源氏は、透垣がほんの少し折れ残っている物陰に、以前から立っている男に気が付く。それはなんと頭中将であったのである。

源氏だけでなく頭中将も姫君に関心をもち、二人はライバルのような関係になっていく。しかし、二人が手紙を送ってもどちらにも返事がないのである。季節がいくつか過ぎると、源氏は姫君の対応にいらだち、命婦に手引きを促す。父親王が生きていたころも訪ねる人がいなかったが、今の荒れ果てた庭に、珍しい立派な方から手紙が来るようになり、周囲も姫君へ返事をするように伝える。この時点では、姫君が世なれていないことや呆れるほど遠慮する性格であること、荒れた場所での生活を送っていることなどに確信を持つことができる。

源氏は、常陸の宮邸を訪れ、姫君に話しかけるが返事がないのである。長い間思い続ける心の中などを話し続ける源氏であったが、答えなどかえってこないのである。見かねた若女房が姫君のそばへ寄って返事をするほどであった。源氏は、引き下がる訳でもなく襖を開けて中に入っていく。暗い中、恥ずかしがる姫君と契りを交わす源氏だが、大目に見てもこの姫君に心がひきつけられたのか分からずつい溜め息をついて暗いうちに帰るのであった。帰った後、源氏は早い方が誠意があるとされる後朝の文(2)も、夕方ころに遣わしたのだ。にも関わらず

「正身は、御心の中に恥づかしう思ひたまひて、今朝の御文の暮れぬれど、なかなか咎とも思ひわきたまはざりけり」　(「末摘花」三一ページ)

姫君は昨夜のことを恥ずかしいと思うばかりで、手紙が夕方にきたのも落ち度と考えてもいないのである。返事をすることを周囲に改めて勧められ、やっと姫君は送ったのだ。

口々に責められて、紫の紙の、年経にければ灰おくれ古めいたるに、手はさすがに文字強う、中さだの筋にて、上下ひとしく書いたまへり。見るかひなうう置きたまふ。いかに思ふらんと、思ひやるもやすからず。かかることをくやしなどはいふにやあらむ、さりとていかがはせむ、我はさりとも心長く見はててむと、思しなす御心を

知らねば、かしこにはいみじうぞ嘆いたまひける。
（「末摘花」三二～三三ページ）

紙は古いにも関わらず、筆跡はしっかり中昔の趣であった。これは、行成風以前のまだ草仮名の小野道風や藤原佐理などの書風と考えられ、少し古い時代のものである。行の上下を揃えた書式とは、散らし書きではなく各行揃えられた字配りで、優しさや心くばりが現れていないことが分かる。姫君の少し古い知識、風情のないこと、周囲に言われて行動するといった性格を感じることができる部分である。源氏は見るかいもなくがっかりするのであった。それと同時に、この姫君を自分は末永く世話をしようと思うのだ。がっかりしているにも関わらず、世話をすることを決める源氏に違和感をおぼえたが、さすが主人公といったところだろうか。

その後、源氏はこの姫君のもとへの訪れを怠るのであった。紫の君(3)を引き取ったことにより、更に姫君のことを優先する理由もなくなったのであろうことは察する事ができるだろう。それでも、時は過ぎると今までは手探りではっきりしない、もっとよく見届けたいと源氏は思うのだ。夜、そっと邸内へ入り格子の隙間からご覧になるが姫君の姿はもちろん見えない。しかし、古く荒れた邸の様子やみすぼらしい食事(4)といったみっともない様子が見えるのであった。源氏は夕顔が襲われて死んだ時の某院と、荒れている有様を比較するほどであった。ここで源氏が某院を想うことによって、読み手はもう一度夕顔のことを思い出し、無意識のうちに姫君を比較してしまうのではないだろうか。

をかしうも、あはれにも、やう変へて心とまりぬべきありさまを、いと埋れ、すくよかにて、何のはえなきをぞ、口惜しう思す。
（「末摘花」三八ページ）

ここで姫君の引っ込み思案、情味がなく何の見栄えもしないことを源氏が残念に思っていることが分かる。読み手も源氏と同じように、残念に思うことがないとは言えないだろう。

2 「末摘花」巻の「笑い」―理想と現実―

さて、いくつかの季節を超え、やっと源氏は姫君の姿を見ることができる。その際にも、姫君は女房たちからの助言・勧めでやっと行動し、源氏が姿を見るのであった。

まづ、居丈の高く、を背長に見えたまふに、さればよと、胸つぶれぬ。うちつぎて、あなかたはと見ゆるものは鼻なりけり。ふと目ぞとまる。普賢菩薩の乗物とおぼゆ。あさましう高うのびらかに、先の方すこし垂りて色づきたること、ことのほかにうたてあり。色は雪はづかしく白うて、さ青に、額つきこよなうはれたるに、なほ下がちなる面やうは、おほかたおどろおどろしう長きなるべし。痩せたまへること、いとほしげにさらぼひて、肩のほどなどは、いたげなるまで衣の上まで見ゆ。…
頭つき、髪のかかりはしも、うつくしげにめでたしと思ひきこゆる人々にも、をさをさ劣るまじう、袿の裾にたまりて、ひかれたるほど、一尺ばかり余りたらむと見ゆ。（「末摘花」三九～四〇ページ）

これでもかと容姿について描写されている姫君はなんと笑いの種になるものであったろうか。特に目立つとして書かれている鼻は後に姫君の名前である末摘花に通じるものだ。さらには、容姿だけでなく容貌、着ているものにまで言及されているのである。

聴色のわりなう上白みたる一重ね、なごりなう黒き袿かさねて、表着には黒貂の皮衣(5)、いと清らに香ばしきを着たまへり。古代の故づきたる御装束なれど、なほ若やかなる女の御よそひには、似げなうおどろおどろしきこと、いともてはやされたり。
（「末摘花」四〇～四一ページ）

立派であるものの、若い女に似合うものではなく、更には古風(6)だといわれている。ここが一番「笑い」となっている分かりやすい場面だと考えられる。古風で世間知らず。髪は綺麗だが醜女のような姫君という

展開。源氏が現実を知って驚く場面である。

ここで笑われる対象について考えていきたい。これまでの女性よりも細かく描写された醜女のような姿、荒れ果てた邸に住み、古風で世間知らずな姫君は、いい笑いものであるだろう。姫君が笑いの対象であることは大前提として存在する。しかし「笑い」の対象は光源氏にもなるのではないだろうか。なぜならば、夕顔を忘れられず、自分の理想像を勝手に姫君へ抱いたのは、光源氏だからだ。実際は理想像とは遠い姫君であり、それを知らずにいる源氏は読み手からすると、どれほど滑稽なものであっただろう。福田和代氏の論文(7)では、末摘花を中心に源氏物語における笑いについて書かれており、その中で「末摘花」巻における笑いについてこう述べている。

> 確かに末摘花の属性はおかしみを感じさせる要素であり、源氏は後になってこの紅鼻をめぐり命婦や若紫とたわむれている。けれども、末摘花の属性は何よりも源氏の夢を破るためのものとして造形されたものである。自分勝手に夕顔のような姫君を想像しきっていた光源氏を、そして現実によって容赦なく夢を破られた源氏を描くことに、この巻の中心があるのだ。この巻のおかしみの中心もそうした源氏の「間違ひ」にあるのである。

確かに、源氏の間違いという意味ではこの姫君は笑いの対象となるだろう。どうやっても間違いの相手＝末摘花（常陸の姫君）となるのだから。それと同時に、読み手も源氏と同じく夕顔を思い出し、更には源氏よりも先に姫君という存在のおかしみを知ることができたはずだ。源氏よりも先に、この姫君の正体、琴がそれほど上手くないこと、命婦と姫君の会話などから古風なこと、世間知らずなことを理解することができる。だからこそ読み手は、源氏のことを笑いの対象として見ることができるのだろう。理想と現実の差がわかる読み手だからこそ笑えることとなる。

姫君の姿を見た源氏はいつも無言であった姫君と同じように、ものを言えなくなる気持ちになる。姫君のいつもの無言が何とかなるかと考え、あれこれ話すが結局恥ずかしがって口を袖で隠すだけであり、その様子でさえ田舎じみて古めかしいとされている。

> 「朝日さす軒のたるひはとけながらなどかつららは結ぼほるらむ」とのたまへど、ただ「むむ」とうち笑ひて、いと口重げなるもいとほしければ、出でたまひぬ。
>
> （「末摘花」四二ページ）

今まで手紙を出しても返事がなかなかこなかった事が分かりやすく「笑い」に繋がった場面ではないだろうか。おくらなかったのではなくおくれなかったのだと。返事ができず笑い過ごす姫君の残念さ知識のなさなど、マイナスな面がより多く印象に残るようになっているとまで感じさせられる。

源氏は屋敷を出てから、この姫君に対して

> 我ならぬ人は、まして見忍びてむや、わがかうて見馴れけるは、故親王のうしろめたしとたぐへおきたまひけむ魂のしるべなめりとぞ、思ささる。
>
> （「末摘花」四三ページ）

姫君に出会った事を故親王の魂の導きであるだろうと思わずにはいられないと言うのである。非常に上手な保険のかけかたではないだろうか。この姫君に夢をみていた自分のことを誤魔化すように、いかにも故親王が娘を心配しすぎるからとしているのである。ここで思い出されることは姫君の古風さではないだろうか。いかに父の影響や教えなどを受けているかを読み手は知っているのだ。それによって故親王の魂の導きに対して疑問や、源氏が誤魔化していることに気付きにくいようになっているのだとも考えられる。

源氏は、黒貂の皮ではない絹や綾・綿などを、老女たちなど姫以外の人のためにも配慮して贈るのであった。このことに対して姫君は何も恥ずかしそうにしていないという。源氏は世話をみると決めた通り、普通とは違う立ち入った世話をしていくのである。そしてここでも姫君は別の女と比較されている。

「かの空蝉の、うちとけたりし宵の側目には、いとわろかりし容貌ざまなれど、もてなしに隠されて口惜しうはあらざりきかし。劣るべきほどの人なりやは。げに品にもよらぬわざなりけり。心ばせのなだらかにねたげなりしを、負けてやみにしかな」と、もののをりごとには思い出づ。

（「末摘花」四五ページ）

それほど美人というわけでもなかった空蝉(8)と比較されたうえ、振る舞いの良さがあった空蝉の評価があがっているように捉えることができる。反対に、読み手は姫君のことを空蝉よりも劣っているのだと認識せざるを得ないのである。

これだけに止まらないのがこの「末摘花」巻だ。年も暮れた頃、姫君は源氏に大輔の命婦を通して手紙と元旦の装束を贈るのだが、これがまた知識のなさ等を強調することになっているのだ。命婦でさえも源氏に伝えにくく思っているほどである。陸奥国紙(9)に香りだけは深くたきしめられた手紙。精一杯詠んだであろう歌は

からころも君が心のつらければ袂はかくぞそぼちつつのみ
（あなたさまのお心がつらく思われますので、私の袂はこんなにも涙に濡れてばかりおります。）

（「末摘花」四七ページ）

源氏は合点がいかず首をかしげるようなものであった。さらに、元旦の晴れ着を贈る(10)が、流行の薄紅色のたまらないほど艶もなく古ぼけた直衣で、裏表が同じように色の濃いものを贈って、流行をも知らず、歌を教えられるような人も周囲にいないことが言われている。

なつかしき色ともなしに何にこの末摘花を袖にふれけむ
（親しみを感じる色でもないのに、どうしてこんな紅の花に袖を触れてしまったのだろうか。）

（「末摘花」四九ページ）

この歌は姫君に贈られたものではなく、文にいたずら書きをしているものである。そして、姫君が末摘花と呼ばれるもととなっている。そもそも末摘花とは、紅花のことである。赤や黄色の花を咲かせ、紅色の染料をとることができる。末から本に向かって咲いていき、それにつれて摘むことから末摘花とも呼ばれている。この紅花が姫君の赤い鼻とかけられていることは理解するに容易いであろう。ここでまた一つ「笑い」が生まれたのである。この笑いは姫君を対象とした笑いとなっており、源氏だけでなく読み手も姫君に対してクスッとなるような流れになっている。源氏の返事は

逢わぬ夜を隔つる中の衣手にかさねていとど見もし見よとや
（逢わない夜が重なって、仲を隔てる袖を恨めしく思っているのに、さらにこの衣を重ねて、いっそう逢わぬ夜を重ねてみよというのでしょうか）

（「末摘花」五二ページ）

姫君に合わせるように白い紙に書かれた返事も女房たちは感心するものであった。大晦日の日に源氏から命婦を通して姫君に贈られたものは、君のお召料として人が献上した装束一揃いに、葡萄染(11)の織物の装束、山吹襲(12)やら色とりどりのものであった。命婦はこの時点で、先日のお召物の色合いがよくなかったのかと考えるのだが、老女や女房は、姫君が贈った紅色も見劣りしないと言い、歌も筋道が通っていてしっかりしており、返歌はただ風情があるという方面だけなどと言うのだ。いかに姫君側は古風な考えをもって過ごしているかが分かるだろう。

正月七日の夜、源氏は姫君のもとを訪れる。翌朝日がのぼるころには、向い側の廊下が屋根もなく壊れていて日差しが入り、はっきり部屋の中までのぞきこめる。源氏は格子を引き上げるとき、姫君の姿を見てしまった時のことから格子は全て上げず、脇息を押し寄せてそれにもたせかける。古めいた鏡台の唐櫛笥(13)や化粧道具の箱を女房が取り出すと、男性用の道具も少しはあり、源氏は気がきいていると思う。さらに、姫君の衣装が世間並みだと思い、それは先日の源氏が贈った衣装箱の趣向をそのまま着ているからなのだが、そのことに源氏は気が付かない。ここでは、鏡台など男性用としてのものは今までの恋愛からのものではなく古いということから父宮のものだろうと想像がつく。ここで源氏は姫君

の声を聞かせてほしいと言うと、姫君はやっと震えた声で「さへずる春は」と言葉にする。

「さりや。年経ぬるしるしよ」と、うち笑ひたまひて、「夢かとぞ見る」とうち誦じて出でたまふを、見送りて、添ひ臥したまへり。口おほひの側目より、なほ、かの末摘花、いとにほひやかにさし出でたり。見苦しのわざやと思さる。　（「末摘花」五五～五六ページ）

末摘花と赤くなっている鼻がかけられており、見苦しいと源氏が思う場面だ。また姫君のマイナスな印象が書かれているが、この後すぐに赤い鼻を笑いとする場面がある。二条院で紫の君と戯れる場面だ。

まずは紫の君と比較されており、紅はこうも慕わしいものであったかと思い、かわいらしいと姫君と比較となっている。古風な祖母君の育ての名残でお歯黒もせず眉も源氏が整え、かわいらしく清らかである紫の君、同じく古風であるはずなのに幼いからこそであるのか〝かわいらしい〟となっているが、姫君は〝世間知らず〟とこういったところでも比較され姫君のマイナスな印象が強くなっているようにとれる。紫の君が絵を描いて色を塗っている場面となり、源氏も描くのだが、髪の長い女を描き、鼻に紅を塗り、絵に描いても見たくないものだという。

わが御影の鏡台にうつれるが、いときよらなるを見たまひて、手づからこの紅花を描きつけ、にほはしてみたまふに、かくよき顔だに、さてまじれらむは見苦しかるべかりけり。姫君見て、いみじく笑いたまふ。「まろが、かくかたはになりなむ時、いかならむ」とのたまへば、「うたてこそあらめ」とて、さもや染みつかむと、あやふく思ひたまへり。　（「末摘花」五七ページ）

赤い鼻を笑い話として戯れているのである。美しい顔でさえ見苦しくなってしまうことを改めて明確にすることで、いかに姫君が見苦しいものであったかが強調される。読み手はこう何度も赤い花などの言葉を目にすることで、紅花・赤色に対し末摘花と呼ばれたあの姫君を思い浮かべずにはいられないだろう。源氏は階隠(14)のもとの紅梅の色づいているのをみて、

「紅の花ぞあやなくうとまるる梅の立ち枝はなつかしけれどいでや。」
（赤い花はどういうわけか好きになれない。その紅梅の伸びた枝は、親しみが持てるけれども。いやどうも）　（「末摘花」五八ページ）

と溜め息をつく。姫君の鼻がどれほど印象強いものであったかがうかがえる。

このように姫君のマイナスな面ばかりが描写されることによって、源氏の「間違い」に対しての「笑い」の要素が増え、「末摘花」巻は笑いの話としてとらえられるのだと考えた。つまり醜女のようにかかれ、性格や世間知らずなところなど姫君が笑いの対象であるということは前提として存在する。その上で、源氏の言動も読み手からすると笑いの対象だということである。では、次にこの姫君が登場する「蓬生」巻ではどのような描かれ方になっているのか見ていきたい。なお、二章以降では姫君のことを末摘花と表記する。

第二章　「蓬生」巻における「笑い」

1　「蓬生」巻での末摘花

「蓬生」巻における末摘花に対しては、他の巻と比較しても悪いように書かれていないのである。変貌しているのではないかといった議論も多く存在する。変貌しているのかを含め、笑いについて見ていきたい。

まず、「蓬生」巻は源氏が謫居、つまり須磨へと退去しており、人々は悲しんでいるという始まりである。源氏が都を離れていることによって、源氏を慕う思いから苦しがる人たちが存在した。さらには、自活することができる女たちと支援がないことによって困窮する女といった違いができた。そのなかでも哀れとされて登場する女が〝末摘花〟である。

末摘花の貧しさを表すように「待ち受けたまふ袂の狭きに、大空の星

の光を盥の水に映したる心地して」と、源氏の援助が困窮の末摘花にとっては無上の恵みのようだと表現されている。盥の水に星かげを映すことは、七夕行事の一つだとされており、末摘花の夢見心地も重なっているとも考えられている。「末摘花」巻の中で貧しさについては語られており、周知であった。しかし源氏が支援したことによって人並みに馴れてしまったのである。だからこそ支援が止まり、元の貧しさに戻っただけでも、耐えられなくなるのだ。女房たちは年月とともに離れ去り、上下の人々の数も減っていくほどであった。荒れていた宮邸の中は、狐の住みかになって気味悪く人気のない木立に梟の声を朝夕に聞き、人がいたから隠されていたが、木霊など奇妙なものが、わがもの顔に姿を現すほどにまで荒れ進んでいた。女房は手放して恐ろしくない住まいへ移ることを進める中、

「あないみじや。人の聞き思はむこともあり。生ける世に、しかなごりなきわざはいかがせむ。かく恐ろしげに荒れはてぬれど、親の御影とまりたる心地する住み処と思ふに、慰みてこそあれ。」

（「蓬生」二一四ページ）

末摘花は手放すことを少しも考えていないのであった。むしろ親の面影が留まっている心地がする古い住み処と思うと、心も慰められると考えているのだ。道具等に関しても、古風であり、昔の様式できちんとしているものを欲しがる人はおり、女房たちは今日明日の見苦しさを繕おうとするが、末摘花は

「見よと思ひたまひてこそ、しおかせたまひけめ。などてかかろがろしき人の家の飾とはなさむ。亡き人の御本意違はむがあはれなること」とのたまひて、さるわざはせさせたまはず。

（「蓬生」二一五ページ）

文の返事をおくるほどの知識もなく世間知らずさを源氏からも読み手からも笑われていた末摘花はどこへいったのかと問いたくなるものである。「末摘花」巻での古い道具や古風な描写があった部分に対して読み手は違う視点で読むことができるのではないだろうか。ただ古いものを使っているのではなく、亡き父宮の想いを持っているのだと。

そうはいっても末摘花には誰か訪れるわけでもなく、ただ御兄である禅師の君だけが京に来た際に顔を見せるだけだという。この兄もまた古風で、浮世離れした聖で生い茂った雑草も取り除くものと気付かないような人であったため、さらに邸は荒れ果てていく。

浅茅(15)は庭の面も見えず、しげき蓬は軒をあらそひて生ひのぼる。葎は西東の御門を閉じ籠めたるぞ頼もしけれど、崩れがちなるめぐりの垣を、馬牛などの踏みならしたる道にて、春夏になれば、放ち飼ふ総角の心さへぞめざましき。

八月、野分荒かりし年、廊どもも倒れ伏し、下の屋どものはかなき板葺なりしなどは骨のみわづかに残りて、立ちとまる下衆だになし。煙絶えてあはれにいみじきこと多かり。盗人などいふひたぶる心ある者も、思ひやりの寂しければにや、この宮をば不用のものに踏み過ぎて寄り来ざりければ、かくいみじき野ら藪なれども、さすがに寝殿の内ばかりはありし御しつらひ変らず、つややかに掻い掃きなどする人もなし、塵は積もれど紛るることなきうるはしき御住まひにて、明かし暮らしたまふ。

（「蓬生」二一六～二一七ページ）

とにかく荒れ果てていることがわかる場面である。盗人までもがこの邸の貧しさを察してか近寄らないほどとされている。読み手はこの末摘花の状況に対して、まずは同情心が生まれるのではないだろうか。そして同情心が生まれると同時に、邸を移らない末摘花の頑固さがよく理解できるようになっていると考えられる。普通なら、寂しい生活も古歌や物語などのような慰みで紛らわしたり、気の合った者同士で手紙のやりとりをすることによって紛らわそうとしたりするとされるが、末摘花は違う。

親のもてかしづきたまひし御心おきてのままに、世の中をつつましきものに思して、まれにも言通ひたまふべき御あたりをも、さらに馴れたまはず、古りにたる御廚子開けて、唐守(16)、藐姑射の刀自(17)、か

ぐや姫の物語の絵に描きたるをぞ、時々のまさぐりものにしたまふ。
（「蓬生」二一七～二一八ページ）

末摘花は、古風な日常をおくっていた。貧しさと古風さを描かれ続ける末摘花であったが、親族が登場し始めるこの後、その評価は変わり始める。この巻で末摘花には叔母がいることがあかされるのだが、末摘花の母北の方の姉妹で身を落して受領の北の方になっている人であった。末摘花は叔母とも親しく付き合いをしていない。この叔母は、

「おのれをばおとしめたまひて、面ぶせに思したりしかば、姫君の御ありさまの心苦しげなるも、えとぶらひきこえず」など、なま憎げなる言葉ども言ひ聞かせつつ、時々聞こえけり。
（「蓬生」二一九ページ）

高い家柄でありながら落ちぶれてしまう宿命の人だからなのか心根が世間並み、低俗に近い叔母であった。この叔母は、自分が見下げられてきた報復をするためにも末摘花を自分の娘たちの召使いにしようとし、琴の音を聞きたがっている娘がいるといって侍従も勧めるが、末摘花は思慮深さから付き合いをしないのであった。この叔母が登場することによって末摘花は、今まで夕顔などと比較され下にみられていたが性格含めよりひどい、低俗な考えをもっていることが分かる叔母と比較するような構図になる。すると読み手の、末摘花に対してのマイナスな面は影をひそめ始め新たな印象を持ち始めてもおかしくはないだろう。この後も叔母は末摘花を西国へ同行しようと勧誘するのだが、末摘花は拒否し続ける。そんな中、源氏がついに都に帰ってくると天下の人々は慶事として大騒ぎする。しかし源氏は末摘花のことを思い出すような様子がないのだ。末摘花は気落ちし、悲しく人知れず泣くが、そこへ叔母は、

「さればよ。まさにかくたづきなく、人わろき御ありさまを、数まへたまふ人はありなむや。仏、聖も、罪軽きをこそ導きよくしたまふなれ、かかる御ありさまにて、たけく世を思し、宮、上などのおはせし時のままにならひたまへる、御心おごりのいとほしきこと」
（「蓬生」二二二ページ）

と愚かしげに言うのだ。哀れんでいるこの文では、良いか悪いかはともかく、この叔母からすると父宮や末摘花の母が生きていた時のままの振る舞いをしているように見えているのだ。まずここで末摘花は〝変わっていない〟ということが分かるだろう。側にいた侍従も大弐(18)の甥にあたるという人と親しい仲になり、不本意だが出立することとなる。末摘花を残すことがおいたわしいと下向を勧めるが、末摘花は源氏に望みをかけてひたすら辛抱強く昔通りに耐え忍び続けるのであった。

音泣きがちに、いとど思し沈みたるは、ただ山人の赤き木の実一つを顔に放たぬと見えたまふ御側目などは、おぼろけの人の見たてまつり許すべきにもあらずかし。くはしくは聞こえじ、いとほしう、もの言ひさがなきやうなり。
（「蓬生」二二四ページ）

赤い鼻は変わらずひどい書かれようになっており、細かくかかれていた「末摘花」巻よりも細かく書かれていないためか、更にひどい様子なのかと想像力がはたらく。

さらに冬になるころ、源氏の邸では故院の御追善のための御八講を盛大に営んでいた。徐々に末摘花は、もうこれきりの縁だと諦めになりはじめていく。そうして心が折れかけているところに叔母は再び訪れる。報復を思い下向を勧め続ける叔母であったが、末摘花は「いとうれしきことなれど、世に似ぬさまにて、何かは。かうながらこそ朽ちも亡せめとなむ思ひはべる」（「蓬生」二二八ページ）と気を許していない様子であった。ここで末摘花は世間離れていることを自分で理解していることが分かる。叔母は源氏からの望みなどないと説得を続けるのだが、末摘花の心は動かなかった。最後には叔母は侍従を同行していく。この時、末摘花は自分を見捨てて行くことを恨めしく悲しく思うが、留めるすべもないため泣くばかりであった。役に立ちそうにない老女までもが「いでや、ことわりぞ。いかでか立ちとまりたまはむ。我らもえこそ念じはつまじけれ」（「蓬生」

二三二ページ）と縁故を思い出して邸を後にしようとしているのであった。

この時点で「末摘花」巻の無口な女とは違った印象が生まれることだろう。しっかりと自分の意思で叔母にも女房にも意見を述べている。古風さも父宮からの教えなどを守っているから、つまり自分の中の柱が変わらず存在しているのである。それで、全くといっていいほど変貌しているようにうけとれるのである。

この変貌については多く研究がされており、人物造形に一貫性がないことが指摘されている。森一郎氏は、作者の書こうとする構想、主題に人物が引っ張られ一貫性がなくなってしまったと述べられる。一方で山本利達氏は〝本質的には変貌していない〟と述べるなど両説存在する。本論は順を追って末摘花を見てきたが、「末摘花」巻では、源氏からみた末摘花という視点であり、無口を貫く性格や昔ながらの生活を大切にしているところなどは「蓬生」巻と比較してもさほど変貌していないように思う。また後の巻では、再び他人と比較され悪い評価、マイナスな面が強調されるが、それは比較対象の女よりできていない部分が源氏の視点から見ると目につくからだろう。

では「蓬生」巻での末摘花はどうか。ここで彼女は「末摘花」巻の末摘花と比較されているとは考えられないだろうか。この後の源氏との再会では、邸も末摘花も過去と比較して源氏は見る。読み手もそうだろう。過去と比べて荒れた邸、過去と比べて自分の意思を貫く末摘花というように知らずしらず末摘花を比較して見るようにできていると考えられる。末摘花の変わっていない性格であっても、「末摘花」巻では明かされていなかった末摘花の感情・思考を知ることによって新しい人物のように認識してしまい〝末摘花〟という比較対象ができることによって〝末摘花〟の評価は上がっているのではないだろうか。よって変貌はしておらず、比較対象の違いだと私は考える。

2 「蓬生」巻に「笑い」は存在するか

さて、慰めてくれた侍従もいなくなり独り悲しく過ごす末摘花であったが長い年月を経てついに源氏と再会する。源氏は末摘花に会いに来たのではなく、花散里を思い出し会いにいく途中だった。末摘花のことなどすっかり忘れており、道中に常陸の宮の邸だということを思い出し惟光に住人が変わったかどうかの確認を頼む。一方、末摘花は昼寝の夢に父宮を見て悲しさを感じ、雨漏りで濡れた廂の間の端を拭かせ、あちこちの敷物を片付けさせ人並みになっていた。惟光が邸に入り確認した後に、源氏も邸へと入る。

たづねてもわれこそとはめ道もなく深きよもぎのもとの心を

（「蓬生」二三九～二四〇ページ）

昔に変わらない末摘花の心を、と源氏は過去の末摘花と比較するようになっている。末摘花は嬉しいけれど恥ずかしいと思いながら再会を果たす。源氏は、心変わらず案じていたが末摘花からの便りがない恨めしさがあったとして何も末摘花に便りもなかったことを誤魔化している。読み手は、源氏にその気がなく完全に忘れていたことをしっかりと知っているためここはひとつ「笑い」となり得ると考えられる。長年のご無沙汰は末摘花だけでなく誰もが同様だとし、うまく流している。

藤波のうち過ぎがたく見えつるはまつこそ宿のしるしなりけれ

とは源氏が再会の偶然を認めながらも末摘花の心に対しても詠んだ歌である。それに対して末摘花は

年を経てまつしるしなきわが宿を花のたよりに過ぎぬばかりか

（「蓬生」二四三ページ）（源氏歌も同様）

歌を切り返すのである。前回マイナスな面しか見ていなかった源氏や、読み手は少しずつ彼女に対する印象が塗り替わってはいかないだろうか。源氏のことを待つ末摘花を見てきた読み手は源氏よりも同情心なども含めて印象は変化して当然であっただろう。ここから源氏は末摘花のマイナスの面を見ておらず、評価が一変している。彼は荒れ果てている邸から末摘花の不憫さを感じる。

ひたぶるにものづつみしたるけはひの、さすがにあてやかなるも、心にくく思されて、さる方にて忘れじ、と心苦しく思ひしを、年ごろさまざまのもの思ひにほれぼれしくて隔てつるほど、つらしと思はれつらむと、いとほしく思す。（「蓬生」二四四ページ）

上品で奥ゆかしいと思い、そういう方面を長所として忘れないと思っていたという。さらには、その後

かの花散里も、あざやかに今めかしうなどははなやぎたまはぬ所にて、御目移しこよなからぬに、咎多う隠れにけり。（「蓬生」二四五ページ）

花散里と比較されているにも関わらず、末摘花の評価は下げられていないのである。「末摘花」巻のままの印象であれば、比較された時に評価は下げられていたであろう。源氏を待ち続ける姿が書かれていたからこそ源氏は長所として捉え、罪悪感などからも評価を下げなかった。いや、下げられなかったのではないだろうか。

このように「蓬生」巻では、末摘花が救われ始めるだけで、「笑い」とする場面はないようにも見える。しかし「蓬生」巻には、おもしろおかしい「末摘花」巻での笑いとは違うが、笑われる対象であった末摘花が実は変わらぬ性格と考えをもって生きている。それにより、笑っていたはずの源氏と読み手が、マイナスな面しか見ていなかった事を笑われる形になっているのではないだろうか。その「笑い」があるからこそ、源氏が末摘花を自分の理想像にあてはめマイナスな面しか見ていなかった過去と比較して、同じことを長所として見るようになっていることが、十分「笑い」になっているのだろう。末摘花を笑っていたにも関わらず、後から知ったことでプラスに捉えることは、読み手からすると源氏に対して「笑い」を誘うものであっただろう。つまり、末摘花を「笑い」の対象とした上で、源氏の間違いを読み手は「笑い」としていたものが「末摘花」巻。マイナス面しか見ていなかった源氏が今度は長所としてプラスに捉えてばかりいることを読み手が「笑い」としているのが「蓬生」巻であると考えられる。

その後、源氏は常陸の宮邸に召使を遣わし、蓬を払わせ、板垣というものをしっかりと造って繕わせたのである。さらに、二条院の近い所に邸を造らせたのだが、そこへ迎え入れるという手紙をおくる。末摘花を厚遇することは前世からの因縁。宿世の力によるものといったお伽噺のようにおさめようとされている。源氏だけでなく末摘花に見切りをつけていた上下の召使の人たちは、我も我もと参上しようとしたのであった。それを末摘花は受け入れるのだ。ついには邸も人が多くなり、明るく活気づいていく。二年後には、末摘花は東の院(19)に移り住み源氏が対面することは難しくとも、何かの折には覗きになるなど軽んじた扱いではなかったとされる。

やはり「蓬生」巻での「笑い」は読み手が源氏を笑うことができることにあると考える。末摘花に対し別の女と比較してマイナスな面ばかりみて笑っていた源氏が、自分のことを待ち続けていた末摘花に対し手のひらを返したようにプラスの面を見るのだから「笑い」であるだろう。

しかしそう考えるならば、「末摘花」巻で源氏と同じく末摘花のことを笑っていた読み手も「笑い」の対象ではないか。読み手も源氏と同じく末摘花を「笑い」の対象として見ており、源氏と同じく「蓬生」巻で末摘花自身の考えなどを知り良いように捉えることができるのだから。源氏よりも早く・多くの情報を知ることができた読み手は、誰よりも「笑い」の対象にふさわしいのではないだろうか。もしかすると源氏よりも笑われる立場にいるのではないかとも感じさせられる。やはり「笑い」は存在していると考えられる。

この後の巻に登場する末摘花はまたマイナスな面を書かれているのだが、そこでは「笑い」がどのようになっているのかをみていきたい。

第三章　「笑い」の対象

1　「玉鬘」「初音」「行幸」「若菜上」巻での末摘花

さて、「蓬生」巻では悪く書かれていなかった末摘花であったがこの後評価はまた一転している。別の女と比較され評価されているのだが、「末摘花」巻の笑われるような書き方へと戻っているのである。では「笑

い」も「末摘花」巻と同じような笑いになっているのかを見ていきたい。

まず「玉鬘」巻においての末摘花の比較されている場面から見ていく。

かの末摘花の言ふかひなかりしを思し出づれば、さやうに沈みて生ひ出でたらむ人のありさま、うしろめたくて、まづ文のけしきゆかしく思さるるなりけり。

（「玉鬘」二三四ページ）

ここでは玉鬘[20]の教養や性格といったことを知るために手紙の返事で様子を見たいと源氏が思う理由として末摘花が思い出されている。読み手は「末摘花」巻の末摘花をここで思い浮かべるだろう。玉鬘からの返事は、唐の紙のよく香を焚きしめてあるものに書いてあった。

数ならぬみくりやなにの筋なればうきにしもかく根をとどめけむ

とのみほのかなり。手は、はかなだちて、よろぼはしけれど、あてはかにて口惜しからねば、御心おちゐにけり。

（「玉鬘」二三六～二三七ページ）

気品があって見苦しくないとして、「末摘花」巻内の末摘花の手紙と比較している。同じ没落した姫君として比較されていることで、明確に玉鬘の評価は上がり、末摘花の評価は下がることになる。さらに、古風だと言われ続けていた末摘花に対し、今風であるという書かれ方を玉鬘はしている。

そして、源氏が正月の衣装をそれぞれの方々へ調えて贈る場面となり、ここから末摘花は「笑い」の対象になっているのである。源氏が贈る衣装を選んでいるところには、紫の上も一緒にいる。紫の上は源氏が贈る衣装からその人たちの器量を推察しようとしているのである。そのことを理解した上で源氏が末摘花に贈る衣装を選んだ場面にも笑いは散りばめられている。

「いで、この容貌のよそへは、人腹立ちぬべきことなり。よきとても物の色は限りあり、人の容貌は、後れたるも、また、なほ底ひあるものを」

とて、かの末摘花の御料に、柳の織物の、よしある唐草を乱れ織れるも、いとなまめきたれば、人知れずほほ笑まれたまふ。

（「玉鬘」二五二ページ）

人知れずほほ笑むという言葉が入っているほどはっきりと「笑い」になっているのである。これは、源氏が末摘花に対して笑っているものであり、立派なものを選んでいても容貌との差がまた笑いとなっているのだ。

そして、お礼の返事は並一通りではなく、使いに対する贈り物もそれぞれの心遣いが見えるのだが、末摘花は二条の東の院に住んでいるため、他の方よりも風情があるべきなのだ。しかし堅苦しく几帳面な末摘花は、するべき作法をきちんと守り山吹の袿の袖口がひどく煤けているのを下襲も添えないで使いにお被けになった。

御文には、いとかうばしき陸奥国紙の、すこし年経、厚みが黄ばみたるに、

「いでや、賜へるは、なかなかにこそ。

着てみればうらみられけり唐衣かへしやりてむ袖を濡らして」

御手の筋、ことに奥よりにたり。いといたくほほ笑みたまひて、とみにもうち置きたまはねば、上、何ごとならむと見おこせたまへり。御使いにかづけたるものを、いとわびしくかたはらいたしと思して、御気色あしければ、すべりまかでぬ。いみじく、おのおのはささめき笑ひけり。かやうにわりなう古めかしう、かたはらいたきところのつきたまへる、さかしらに、もてわづらひぬべう思す。恥づかしきまみなり。

（「玉鬘」二五三～二五四ページ）

古風で不体裁なところを指摘した源氏は、こうしたさし出がましさの扱いに困るとしている。女房たちもささやき合って笑っている。

「よろづの草子歌枕、よく案内知り見つくして、その中の言葉を取り出づるに、詠みつきたる筋こそ、強うは変らざるるべけれ。常陸の親王の書きおきたまへりける紙屋紙[21]の草子をこそ、見よとて

おこせたりしか、和歌の髄脳いとところせう、病避るべきところ多かりしかば、もとより後れたる方の、いとどなかなか動きすべくも見えざりしかば、むつかしくて返してき。よく案内知りたまへる人の口つきにては、目馴れてこそあれ」　（「玉鬘」二五五ページ）

末摘花の古風な歌は父宮から学んだことが分かる。型にはまった歌を詠むことに対しての皮肉として捉えることができる。末摘花の古風さがここでもマイナスとして捉えられている。

さて新春を迎える「初音」巻での末摘花は、

常陸の宮の御方は、人のほどあれば心苦しく思して、人目の飾ばかりは、いとよくもてなしきこえたまふ。いにしへ盛りと見えし御若髪も、年ごろに衰へゆき、まして滝の淀み恥づかしげなる御かたはら目などを、いとほしと思せば、まほにも向ひたまはず。

（「初音」二七四ページ）

御鼻の色ばかり、霞にも紛るまじく華やかなるに、御心にもあらずうち嘆かれたまひて、ことさらに御几帳ひきつくろひ隔てたまふ。

（「初音」二七五ページ）

昔は綺麗だった髪でさえも、マイナスになるように源氏は見ており、鼻の赤さだけが改めて強調されている。読み手は「末摘花」巻の末摘花よりも醜くなってしまった姿を想像するしかないのではないだろうか。そこにはやはり「笑い」が存在するだろう。

「行幸」巻にて、玉鬘の裳着の儀が行われた。その際六条院の御方々からも祝いの品々が届けられる。末摘花はここでまたしてもマイナスな面を見られている。二条東院の方々はお祝い申し上げるほどの人数にも入らないため、聞き過ごしていた中で、

常陸の宮の御方、怪しうもの麗しう、さるべき事の折過ぐさぬ古代の御心にて、いかでかこの御いそぎをよその事とは聞き過ぐさむと思して、型のごとなむし出でたまうける。あはれなる御心ざしなりかし。

（「行幸」一五三ページ）

妙にきちんとしていて几帳面なうえに時代錯誤ともいえるほどの昔気質な性分のため、作法通りにお祝いを用意するのであった。青鈍色の細長一襲、落栗とか何とか昔の人がもてはやした袷の袴一揃えに紫色の白けて見える霰地の御小袿を、立派な衣装箱に入れ、上包みもきちんとして贈ったのである。

御文には、「知らせたまふべき数にもはべらねば、つつましけれど、かかるをりは思ひたまへ忍び難くなむ。これ、いとあやしけれど、人にも賜わせよ」とおいらかなり。殿御覧じつけて、いとあさましう、例のと思すに、御顔赤みぬ。

「あやしき古人にこそあれ。かくものづつみしたる人は、ひき入り沈み入りたるこそよけれ。さすがに恥ぢがましや」

（「行幸」一五四ページ）

源氏は呆れており、末摘花の出過ぎたことに対してそっと引っ込んでいるのがいいとまで言っている。これは今までの末摘花への呆れを通り越した反応になっている。「蓬生」巻での長所を見ていた源氏が嘘のようである。御小袿の袂には、歌があり、

わが身こそ恨みられけれ唐衣君が袂に馴れずと思へば

御手は、昔だにありしを、いとわりなうしじかみ、彫り深う、強う、固う書きたまへり。大臣、憎きものの、をかしさをばえ念じたまはで

（「行幸」一五四～一五五ページ）

筆跡は昔でさえそうだったのに、どうしようもなく縮こまって、深く彫ったように強く固く書いているとされる。しかも、お祝いの場にも関わらず送っている歌は恋人を恨む体の恋歌なのである。さらに源氏の返事としての歌が、

唐衣また唐衣唐衣かへすがへすも唐衣なる（「行幸」一五六ページ）

まじめに、末摘花が特に好んでいるから詠んでみたのだといいながら、玉鬘に見せるのだが、唐衣ばかり詠んでいた末摘花への皮肉に捉えることのできる「笑い」の場面になるだろう。玉鬘も華やかに笑いながら、気の毒そうにしているのである。ここで末摘花は玉鬘から気の毒にと、同情で「笑い」の対象になっているように考えられる。

さらに「若菜上」巻では、名前のみ登場する。源氏が朧月夜(22)に会いにいくために紫の上に対して誤魔化すのである。

「東の院にものする常陸の君の、日ごろわづらひて久しくなりにけるを、ものさわがしき紛れにとぶらはねば、いとほしくてなむ。昼などけざやかに渡らむも便なきを、夜の間に忍びてとなむ思ひはべる。人にもかくとも知らせじ」

（「若菜上」八一ページ）

夜に出かけることの言い訳として末摘花の見舞いと言うのである。昼に出かけて末摘花のもとへいくことを具合が悪いといい、更には紫の上を誤魔化すために末摘花のもとへと言っているのだから、末摘花は恋愛対象ではもうないのである。

2「笑い」

さて、第三章での「笑い」は「末摘花」巻での「笑い」と同じであったかについてまとめてみたい。「蓬生」巻で古風なところでさえ長所として捉えていた源氏はすっかりいなくなり、またマイナス面ばかりが書かれていた。マイナスな書かれ方は「末摘花」巻における書かれ方と同じだろう。前提として末摘花が「笑い」の対象であることは間違いないだろう。源氏も読み手も再び末摘花の時代錯誤さなどで「笑い」が誘われているのだから。しかし源氏も読み手も「蓬生」巻での末摘花を知っているのである。あの古風さも、末摘花のまっすぐな性格だからこそであり、源氏を待ち続け最後には救われ始める末摘花を知っているのだ。だからこそ読み手は、理想像を求め失敗したかと思えば、かつて短所と捉えたところを長所に捉えて良いように見、時がたてばまた他の女と比較してマイナスな面を見る源氏のことを、「笑い」の対象として見ることができるのではないか。

しかし、「笑い」の対象になり得るのは源氏だけだろうか。読み手は「末摘花」巻を源氏の失敗談のように「笑い」とした。「蓬生」巻では源氏を待ち続ける姿や性格を知り、源氏と同じく末摘花の良い面ばかりを見て読む。この良い面を見ているからこそ、その後の巻でマイナスな面を見る源氏を「笑い」として見ることができる。ならば読み手も「笑い」の対象となるのではないだろうか。源氏と同じく「蓬生」巻をプラスと捉えて読んでしまった時点で、読み手もまた源氏と同じ「笑い」の対象になる。誰に笑われているかは作者だと言いたくなるが、末摘花からではないだろうか。末摘花への印象がふらふらする源氏や読み手だが、最後まで自分の生き方、性格を頑固なまでに貫き通している末摘花からは「笑い」の対象となるだろう。

おわりに

「笑い」の対象について考えてきたが、末摘花や源氏を笑っている読み手もまた笑われているのだという結論となった。「蓬生」巻が存在することにより、ただ古風ではなく、醜女のようで笑われるだけの存在でなくなるのである。

本稿を書く中で私は新たに疑問を持った。源氏は末摘花のことをきちんと恋愛対象として見ていたのだろうか。「末摘花」巻では源氏の理想像としては好まれていた。しかし末摘花自身のことは見ていなかった。「蓬生」巻では、長所と捉えてみることで、同情心や罪悪感といったものによって世話を見る。果たして末摘花、〝常陸の姫君〟を好ましく思っていただろうか。末摘花・源氏物語にはまだまだ魅力がありそうだ。

本文と現代語訳は次による。
中野幸一『正訳 源氏物語本文対照』第二冊・第三冊・第四冊・第五冊・第六冊 勉誠出版、二〇一六～二〇一七年

参考文献・論文

阿部秋生・秋山虔・今井源衛・鈴木日出男『新編日本古典文学全集 源氏物語』①～④（小学館、一九九四～一九九六年）
室伏信助監修、上原作和編『人物で読む「源氏物語」』第九巻―末摘花（勉誠出版、二〇〇五年）
秋山虔『源氏物語の女性たち』（小学館、一九八七年）
坂本共展「源氏と末摘花」（森一郎編『源氏物語作中人物論集』勉誠社、一九九三年）
森一郎『源氏物語の表現と人物造形』（和泉書院、二〇〇〇年）
山本利達「作者の人間理解 ―末摘花を中心に―」（重松信弘博士頌寿会編『源氏物語の探究』十 風間書房、一九八五年）
福田和代「源氏物語における笑い」（東京女子大学『日本文學』34／35、一九七〇年）
野村精一「末摘花から近江君へ ―源氏物語における「笑い」―」（日本文学協会『日本文学』、一九五八年2号）
栗原和子「末摘花その変貌といわれるものについて」（東京女子大学『日本文學』42／43、一九七五年）
片山理恵・久留須倫子「末摘花の役割と蓬生巻の意義」（熊本女子大学国文談話会『国文研究』二〇一五年）
翁筱青「『源氏物語』「ほのか」な琴の音色と末摘花の人生 ―常陸宮との父子関係を視座にして―」（東北大学『日本文芸論』41・42二〇一九年）

（注）

（1）左大臣の長男で母は大宮。葵の上と同母兄弟（『新編日本古典文学全集 源氏物語』①「末摘花」二七一頁頭注一五）
（2）男女が共寝した翌朝におくる。早く送るのが普通（『新編日本古典文学全集 源氏物語』①「末摘花」二八六頁頭注二）
（3）式部卿宮の娘、藤壺の姪。（『源氏物語必携』Ⅱ一二一頁）
（4）食器が青磁ふうの唐製のものながら不格好、哀れな食べ物（『新編日本古典文学全集 源氏物語』①「末摘花」二九〇頁）
（5）黒貂の皮をつぎ合わせて、これに綾の裏をつけ、綿を入れたもの。上に黒貂の皮衣を着、その下に古びて黒くなった袿をさらにその下に白茶けた単衣を着ている。（『新編日本古典文学全集 源氏物語』①「末摘花」二九三頁頭注二二）
（6）元来貴人の着るもの、主に男子用（『新編日本古典文学全集 源氏物語』①「末摘花」二九三頁頭注二三）
（7）福田和代「源氏物語における笑い」（東京女子大学『日本文學』34／35、一九七〇年）
（8）衛門督の娘。老齢の伊予介の後妻となっている。（『源氏物語必携』Ⅱ三五頁）
（9）檀紙。もと陸奥から多く産出した。厚手で白く、小皺がある。懸想文には薄様の色紙を用いるのが普通、これは無趣味。（『新編日本古典文学全集 源氏物語』①「末摘花」二九八～二九九頁頭注一四）
（10）普通贈るのは北の方。（『新編日本古典文学全集 源氏物語』①「末摘花」二九九頁頭注二〇）
（11）紅味のある薄紫の染色、表薄朽葉、裏黄色の襲の色目（『新編日本古典文学全集 源氏物語』①「末摘花」三〇二頁頭注五）
（12）表が薄朽葉、裏が黄の色目（『新編日本古典文学全集 源氏物語』①「末摘花」三〇二頁頭注六）
（13）中国風の櫛箱（『新編日本古典文学全集 源氏物語』①「末摘花」三〇四頁頭注五）
（14）社殿や寝殿造りの殿舎で、建物の階の前に二本の柱を立てて作っ

た庇（ひさし）。階が雨に濡れないよう設ける。社殿のものは向拝（こうはい）ともいう。日隠し。（『日本国語大辞典』「階隠」）

(15) 丈の低いちがや（『新編日本古典文学全集　源氏物語』②「蓬生」三二九頁頭注二四）

(16) 現在伝わらぬ散佚物語の一つ。内容は不明（『新編日本古典文学全集　源氏物語』②「蓬生」三三〇頁頭注一七）

(17) これも散佚物語。室町時代までは伝わった。藐姑射の刀自の養女、照満姫に、太玉の帝が求婚する内容であるらしい。（『新編日本古典文学全集　源氏物語』②「蓬生」三三〇頁頭注一八）

(18) 叔母の夫。大宰大弐。従四位下相当。（『新編日本古典文学全集　源氏物語』②「蓬生」三三三頁頭注二一・二三）

(19) 二条院の東の方に建てた別邸。（『新編日本古典文学全集　源氏物語』②「蓬生」三五五頁頭注一七）

(20) 頭の中将の娘。母は夕顔。（『源氏物語必携』Ⅱ八二頁）

(21) 紙屋院（官立の製紙所）で作った紙。官庁用紙（『新編日本古典文学全集　源氏物語』③「玉鬘」一三九頁頭注一四）

(22) 右大臣の六女、弘徽殿女御の妹。（『源氏物語必携』Ⅱ四九頁）